

図 I-47 稲作渡来ルート

第三章 弥生時代

第一節 弥生時代の概観

稲作のはじまり

弥生時代は農耕の開始により、食料生産に基礎をおく社会が成立した時期で、紀元前三世紀～紀元後三世紀の約六〇〇年間である。一般に弥生時代は、紀元前三～二世紀を前期、前一世紀～後一世紀を

中期、紀元後二～三世紀を後期と三分してとらえられている。なお、弥生の名称は、明治一七年（一八八四）、東京都文京区本郷弥生町の貝塚から発見された土器が、縄文土器とは異なるところから後年、弥生式土器と命名されたことになっている。

弥生文化は大陸から伝えられた稲作農耕と、青銅器や鉄器などの金属器使用によって特色づけられる。稲作の伝来時期については、昭和五三年、福岡県板付遺跡で縄文晩期の夜臼式土器をとまなう水田跡が、翌年には佐賀県菜畑遺跡からさらに古い山ノ寺式土器をとまなう水田跡が発見されたことから一段と古くにさかのぼった。こうした事実、従来、水稲耕作の開始をもって弥生時代としてきた時代観に、新たな問題を提起することになった。稲作伝来の経路も北回り経路（華北から朝鮮半

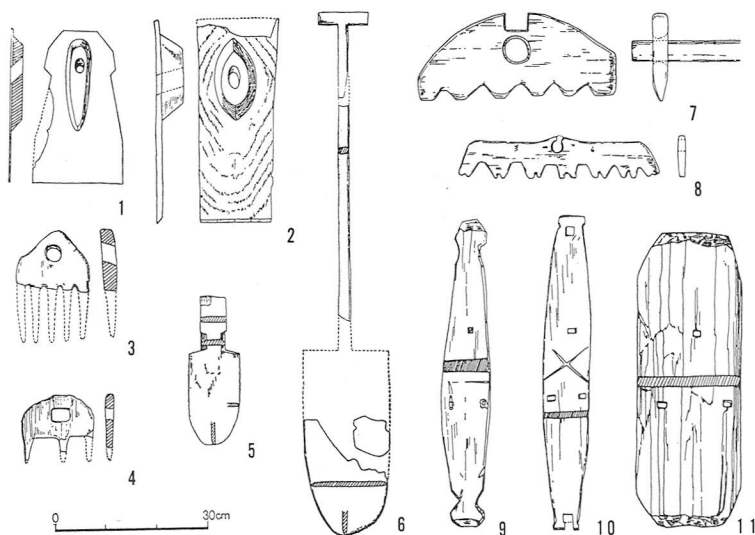


図 I-48 弥生時代の木製農具『日本の考古学』Ⅲより

1・2. 鍬 3・4. 又鍬 5・6. 鋤 7・8. えぶり 9・10. 大足 11. 田下駄

島北部を経由)、南回り経路(華南から南西諸島を経由)など諸説があったが、北回りでは畑作地帯を経由することとなり、南回りも沖繩に弥生文化が存在しないことなどから今では両説とも否定的である。現在、系譜的にもっとも有力なのは、長江下流域から朝鮮半島南部に伝えられた稲作が、北部九州に伝来し、日本各地に拡がっていったとする見解である。

稲作農耕を証明するものは、遺跡からの炭化米、水田址の検出、各種木製農具などである。米はミャンマー北部を原郷とすると思われ、長粒種のインディカ(インド型)、短粒種のジャポニカ(日本型)、中間種のジャバニカ(ジャワ型)に分けられる。弥生米は短粒種に属し、古代中国でも長江以北ではジャポニカが栽培されており、日本への稲作渡来ルートを推定する一根據ともなっている。

水田址は有名な静岡県登呂遺跡をはじめ、近年、検出例が増加している。弥生時代の水田には、登呂遺跡のように一枚が一〇〇〇〇〜二〇〇〇〇平方メートルを超えるような大

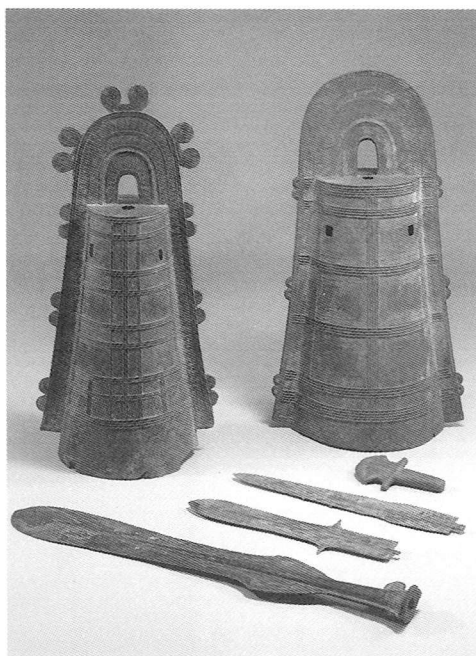


図 I-49 弥生時代の祭器（青銅器）
上、銅鐸。下左より銅鉞、銅戈、銅劍、有肩石斧

区画のものと、群馬県高崎市日高遺跡のように一枚が一〇〜五〇平方メートル程度の小区画のものが存在することが判明した。弥生時代の水田も画的ではなく、立地環境に応じた経営がおこなわれていた実態を知ることができる。水田には、水路や堰、畦畔（けいはん）（あぜ）などが設けられ、中には矢板や杭で補強されたものもある。農具としては、各種の木製鋤類、鋤、田下駄、大足のほか、收穫具としての石庖丁、脱穀用の堅杵（こきね）などが発見されている。

利器から祭器へ

金属器の受容も大きな変化である。利器としての青銅器や鉄器は、それまでの石器に勝り、生産力を発展させる原動力となった。鉄器では斧や鉈（やぐらな）、刀子（やぐらな）などがあり、農具の製作加工などにも威力を発揮したことであろう。青銅器は初め銅劍、銅鉞、銅戈などの武器が導入されたが、弥生中期以降、これらは実用的な武器としてではなく、祭器としての性格をもつ幅広で大形のものが、国内で生産されるようになった。

青銅の祭器については、かつて和辻哲郎によって近畿地方に銅鐸圈（どうたつぐわん）、北部九州を中心に武器形祭器をもつ二大文化圏の対峙（たいじ）が唱えられた。しかし、昭和五九年、島根県荒神谷遺跡（こうじんたに）から銅劍三五本と銅鐸六個、銅矛一六本が出土したことなどから、単純には割り切れず、修正を余

儀なくされている。弥生文化を象徴する祭器は銅鐸である。謎の青銅器と呼ばれた銅鐸は、初期の小型で鳴らして聞く銅鐸から、次第に見る銅鐸へと変化したと考えられるに至った。その機能も、稲作の豊作を祈願し、収穫を祝う祭りの道具として使われたと考えられている。

一方、武器形祭器は、北部九州から対馬にかけて矛形祭器が、瀬戸内に剣形祭器、大阪湾岸に戈形祭器などが分布し、航海の安全祈願などの機能も想定されている。このように、弥生時代には地域ごとに独得の祭器を共有する祭祀が執行されていたと思われる。

青銅器でもう一つ重要なのは、鏡の存在である。現代では化粧具である鏡も、古代には呪具であり、宝器としての性格をもっていた。鏡にかぎらず、今我々が見る青銅器は緑青で変色しているが、製作時には金色に輝いており、人を威圧するに十分だった。銅鏡は、弥生時代には中国からもたらされた漢式鏡のほか、朝鮮半島から将来された多紐細文鏡と呼ばれる凹面鏡、それに国産のものがあった。青銅器は北部九州ではしばしば甕棺墓などに副葬され、權威の象徴として重要な役割を果たした。

弥生時代人

大陸伝来の弥生文化が、農耕や金属器といった技術や物だけを伝えたのか、技術や物を携えた人間が渡来したのかは重要な問題である。日本人の起源論は、縄文人と弥生時代以降の人との骨格変化をどう解釈するかで対立してきた。即ち、この形質変化を一方は人種交替によるものと考え、ほかは生活変革による小進化（時代的变化）と考えたのである。しかし、弥生人といっても地域差があり、全国一律に扱うのは不適切であることも立証されている。弥生人骨の出土には偏りがあり、九州周辺や南関東が比較的恵まれている。そうした中で弥生人骨を多く出土したところとして、山口県土井ヶ浜や佐賀県三津遺跡が知られている。これらの人骨は長身（男の平

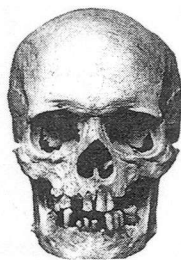


図 I-50 弥生人

均身長一六三センチメートルで、縄文人より平均三センチメートル高いで、顔が扁平という朝鮮半島の人にきわめて近似した特徴をもっている。これに対し、南関東や西・南九州の弥生人は、縄文人とあまり変化がみられず、古墳時代人へと漸移的に変化していることが確かめられている。以上の点から、土井ヶ浜人など北部九州から山口県にかけての弥生人は、半島からの渡来人またはその混血と考えられる。しかし、こうした集団は、縄文人の形質を変えざるほどの数ではなかったため、時代の推移の中で日本人の中に吸収されていったと考えられている。即ち、日本人の基層をなすのはあくまで縄文人であり、狩猟・採集から農耕へという生活様式の変化とともに、少しずつ形質を変化させていったもので、その後七、八世紀頃まで大陸からの渡来人も多く流入したが、日本人の形質を根本的に変えるには至らなかった。

稲作の伝播と社会の発展 北部九州に導入された稲作は、従来、伊勢湾と丹後半島を結ぶ西日本に急速に拡大し、それ以後への伝播はかなり遅れたと考えられていた。このことは、初期稲作を象徴する遠賀川式土器が、広く

西日本に分布することから証明されていた。ところが、昭和五六年、青森県南津軽郡田舎館村垂柳遺跡から、整然とした弥生中期の小区画水田が発見され、人々を驚かせた。その後、昭和六一年、垂柳遺跡の北西二〇キロメートル、岩木川左岸の弘前市砂沢遺跡から弥生前期に遡ると思われる水田遺構が、遠賀川式土器を模した遠賀川系土器とともに発見された。遠賀川系土器は八戸市是川中居遺跡、尾上町五輪野遺跡、秋田市地蔵田B遺跡、酒田市生石Ⅱ遺跡でも発見され、日本海側を北上しての急速な稲作伝播が明らかとなった。

稲作農耕を基盤とする生産力の上昇は、集落内や集落相互の間に貧富の差を生じ、水利や用水管理などをめぐる争

いも生じたであろう。そうした中で、地域集団を統合する有力者、首長が各地に誕生した。この地域集団が次第に大きな統合体になっていく過程は、中国の史書に記されている。

中国では当時日本を倭と呼んでいたが、『漢書』によれば、紀元前一世紀頃、倭が百余国に分立していたこと、ついで『後漢書』では紀元五七年に倭の奴国王が後漢の光武帝に貢物を奉じて朝賀し、印綬を与えられたことなどが記されている。天明四年（一七八四）、福岡県博多の志賀島^{しかのしま}から発見された「漢委奴国王」の金印は、このときに授かったものとみられている。

その後中国では、紀元二二〇年に後漢が滅亡し、魏・呉・蜀の三国時代に入った。有名な『魏志』倭人伝によれば、倭国では二世紀後半の大乱を経て、女王卑弥呼の統治する邪馬台国が成立する。邪馬台国は約三〇か国を支配する連合国家で、卑弥呼は景初三年（二三九）魏に遣使し、「親魏倭王」の称号や印綬、銅鏡一〇〇枚などの贈物を受けた。卑弥呼の死後、男王を立てたが国中が服せず、巷与という一三歳の女王を立てて国が治まったとされている。邪馬台国の所在地については、畿内の大和説と九州説が古くから議論されていることは周知のとおりである。九州説をとれば、三世紀の日本が九州を中心とした地域的連合国家程度の統合体と理解されるのに対し、大和説にしたがえば、西日本を広域に包括する統一の状況を看取することができ、その後の大和政権成立とのかかわりもきわめて重要である。

大規模な環

濠集落

弥生時代の集落は、水田可耕地に近い低地に占地するものが多いが、丘陵や台地上に形成されたものもある。中でも瀬戸内地方では、倭国大乱との関連が注目される戦略的な高地性集落の存在が指摘されている。最近発掘された佐賀県吉野ヶ里遺跡をはじめ、弥生集落には周りを濠で囲んだ環濠集落^{かんろうしゅうらく}が多い。環濠はとくに二重に掘られ、防衛的要素の濃いものである。これは弥生社会が、国家形成へ向けて、戦闘と緊張状況におかれ



図 I-51 大塚遺跡（横浜市港北ニュータウン内）の環濠集落

ていたことを如実に示すものである。我々は農耕社会が狩猟社会より平和的と考えがちであるが、実態は逆である。狩猟・採集段階の縄文集落はいたって開放的で、集落を区画するような施設はみられない。

環濠集落で最大とみられるのは奈良県唐古・鍵遺跡で、吉野ヶ里遺跡を凌ぐ規模が推定されている。ほかに大阪府池上遺跡、愛知県朝日遺跡、神奈川県大塚遺跡などがある。環濠は通常、幅・深さとも三、四メートルあり、濠を掘削した排土を外側に土手状に積み上げれば、比高五、六メートルの障壁となり、外敵の侵入を防御するに十分である。朝日遺跡の環濠集落は、外側に二重の逆茂木の柵と一列の杭で強固なバリケードが築かれていた。

関東地方で環濠集落の典型は、弥生中期後半の横浜市大塚遺跡である。遺跡は鶴見川の支流早淵川左岸、標高五〇メートルの丘陵上にあり、長軸二〇〇メートル、最大幅一三〇メートルのマユ形環濠に囲まれている。環濠内には九七軒の竪穴住居と数棟の倉庫が発見された。住居は大きく三期に分け

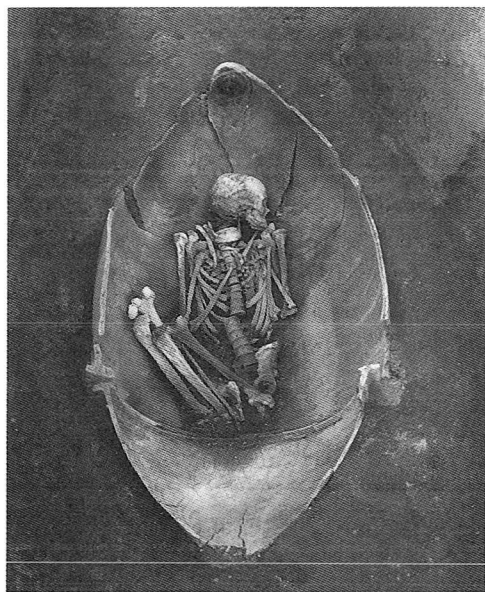


図 I-52 甕棺墓『吉野ヶ里遺跡』概報より

られ、同時に存在したのは各期三〇軒前後、人口百数十人の集落と推定される。また、住居の三分ノ一以上が火災の跡をとどめ、敵襲によって罹災した可能性が高い。この遺跡と関連して重要なことは、小谷をへだてた東南約五〇メートルに、集落と一体をなす墓域、歳勝土遺跡^{さいかつちいせき}の存在である。ここでは二五基の方形周溝墓群が発見されたが、次に弥生時代の墓制についてみておきたい。

甕棺墓と方形周溝墓

弥生時代は農耕生産の開始により、階級社会が形成されていった時代である。この間の事情を端的に示すものに墓制がある。縄文時代の穴を掘っただけの土壌墓に比べ、弥生時代の墓制は複雑である。

北部九州を中心に発展した甕棺墓は、単一の甕に扁平な石材などを蓋とした単棺と、二個の甕の口を合わせた合せ口甕棺があり、二メートル近い長大なものもある。甕棺は共同墓地で、一か所から一〇〇基から数百基発見され、吉野ヶ里遺跡では二〇〇〇基を超える数が確認された。しかし、甕棺の中には漢式鏡や銅剣、銅鉾などの優れた副葬品を有するものもある。これは、社会的身分の高い人も共同墓地の一角に埋葬されたことを示し、集団墓地から離脱して、超越した権力をもった古墳の被葬者とは本質的に異っている。吉野ヶ里遺跡の弥生中期の大型墳丘墓（南北三九メートル、東西二六メートル）も、



図 I-53 方形周溝墓（八王子市宇津木向原遺跡）『宇津木遺跡とその周辺』より

甕棺墓群の北端、共同墓地の一角を占めているとみられる。

一方、近畿地方で弥生前期に生まれた方形周溝墓も、墳丘墓の一種で、他地域に急速に拡大していく。方形周溝墓は、周囲を方形の溝で区画して聖域とし、内部に墓壙を有するもので、昭和三九年（一九六四）に八王子市宇津木向原遺跡で最初に発見された。以来、全国で一〇〇〇基を超える発見例があり、古墳時代にかけて広くおこなわれた墓制である。方形周溝墓の規模は一〇メートル前後のものが多いが、大阪府加美遺跡では長軸二六メートル、短軸一五メートルにもおよぶものがあり、内部から二三基の木棺墓が発見された。一方、関東などでは一周溝墓に一遺体を埋葬するケースが多い。

また、関東から東北南部にかけては縄文時代の伝統を残し、一度埋葬して白骨化した骨を、改めて壺に納めた再埋葬が特異な葬法として弥生中期まで盛行する。栃木県佐野市出流原遺跡などはその代表である。

そのほか、弥生後期には岡山県榑築墳丘墓や山陰地方の

四隅突出墓などの特定個人を埋葬するための大形墳丘墓が発達し、古墳出現の胎動がみられるようになった。

第二節 福生市周辺の弥生文化

多摩の弥生 多摩川流域を含む南関東の弥生時代は、中期以降沿岸部を中心に集落形成が進み、多摩地方など内陸部への浸透は遅れ、弥生時代末期に至って八王子周辺を中心に集落が営まれるようになる。本市域にかぎらず、多摩川中流域左岸では、青梅市から府中市周辺までの間に、弥生集落は発見されていない。この地域に集

落が形成されなかった最大の要因は、治水・灌漑技術の未発達な時代、ときに大洪水を引きおこし、河床礫のゴロゴロするような環境が、可耕地にはなり難かったことに起因すると思われる。その証拠に、多摩の弥生遺跡は、多摩川支流の小河川に臨む台地上に形成されたものが多い。ここでは洪水の心配はないが、小規模で生産力の低い谷戸が開発の中心となっている。

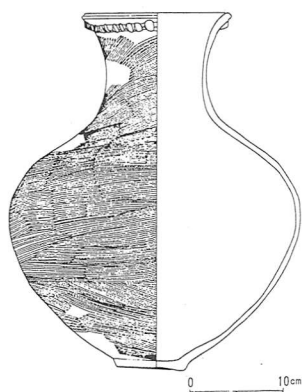


図 I-54 水神平系土器
日野市平山遺跡出土

弥生時代初期のものとしては、日野市平山遺跡から東海地方の水神平系すはんびらの壺が発見されたほか、秋川市二宮神社遺跡や多摩ニュータウン内からも断片的な水神平系の土器が出土している。しかし、初期のこうした土器の存在は、稲作文化が東海地方から流入した経緯を物語るかも知れない。

弥生中期は前半が須和田式、後半が宮の台式に編年されるが、須和田

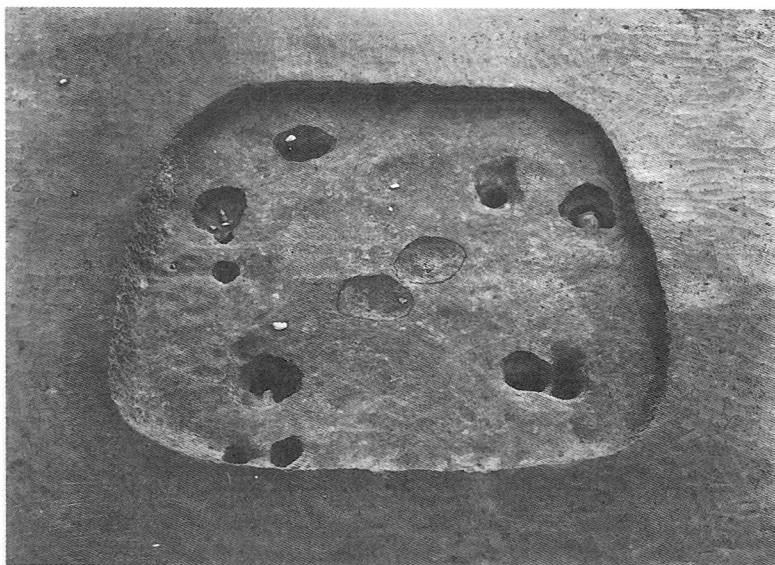


図1-55 馬場遺跡青梅市の堅穴住居址（弥生中期）

式期のものとしては、日の出町岳の上遺跡や八王子市叶谷^{かのうや}町から再葬墓と思われる土器が単独で出土している。しかし、この頃の集落は多摩地域では未発見で、次の宮の台期から弥生集落が散見される。町田市本町田遺跡、稲城市平尾台原遺跡、青梅市馬場遺跡などに住居址の発見例がある。

青梅市馬場遺跡は霞川流域に立地し、荒川水系に属している。ここからは弥生時代の堅穴住居址四軒、再葬墓一基、方形周溝墓一基が発見された。再葬墓は長径〇・六メートルの円形土壇内に、高さ約三〇センチメートルの甕が横たえられていた。使用された土器は、北関東方面の弥生式土器の影響を濃くうかがわせるものである。堅穴住居址は中期後半と後期初頭に属するものが各二軒で、未調査地を含めればもう数軒あるものと想定される。中期後半の住居址は長径四・八メートル、短径四・六メートルの隅丸方形で、柱穴四個と二基の炉址が確認された。また、後期の住居址は一辺が五・二メートルで方形プランに近い。方形周溝墓は一辺が一二メートル、住居群の西端から発見されている。

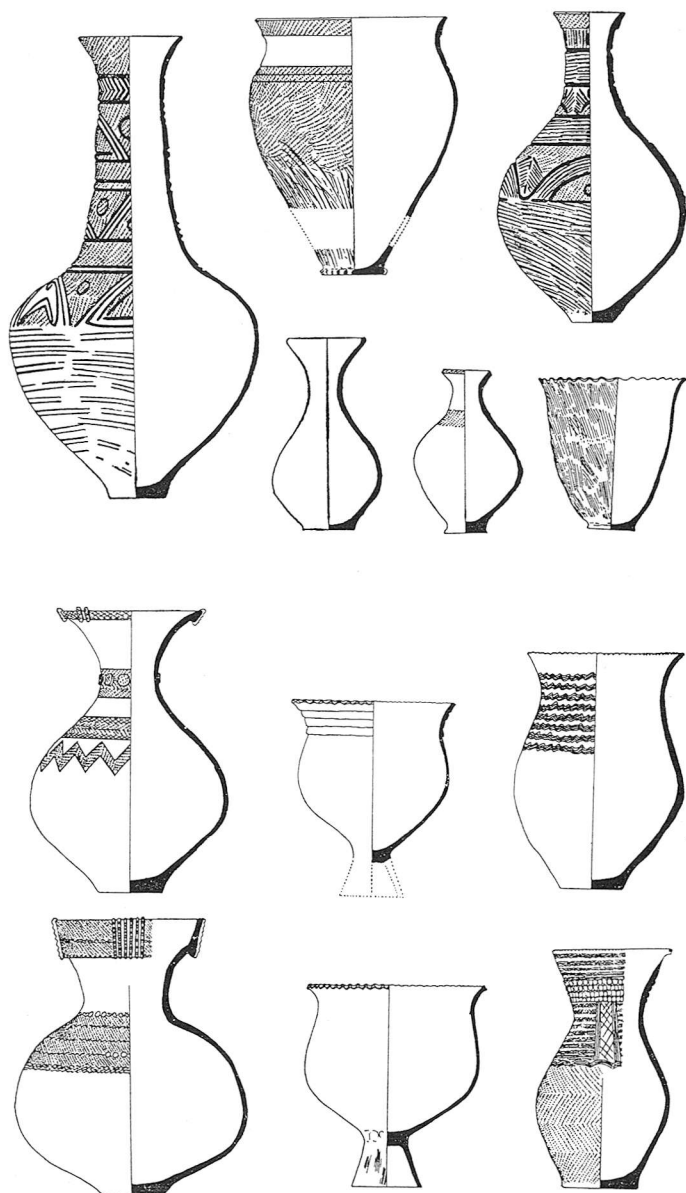


図 I-56 南関東の弥生式土器（上段中期，下段後期）
『日本の考古学』より集成

遺物は土器のほか、石鍬、挟入石斧（えぐりいりせきこ）、片刃石斧、有孔磨製石鏃など弥生時代の特徴的石器類を出土し、金属器流入後も石器を主要な利器としていた本地域弥生人の生活を知る上で興味深い。土器は南関東系のものであるが、北関東の影響が強いところから、この文化が荒川流域から入間川を遡って流入したことを物語り、多摩川流域とは別系統であることがわかる。

弥生後期の土器は久ヶ原式（くがはらしき）、弥生町式、前野町式に編年される。久ヶ原式土器は、ふくらみをもった曲線の器形に優美な細縄文などで装飾された美しい壺を有する。この時期の代表的集落は、多摩川下流域、太田区久ヶ原遺跡がある。続く弥生町期の遺跡では、最近調査された中野区新井三丁目遺跡（旧中野刑務所跡地）などに大規模なものがあるが、多摩地域では終末期に至って集落形成が本格化する。八王子市宇津木向原遺跡は方形周溝墓初発見の記念すべき遺跡とともに、梶国男らの調査で炭化米三〇〇粒が発見されたほか、弥生末期から古墳時代初期にかけての住居址約六〇軒が調査された。ほかに、同市鞍骨山遺跡（くらぼねやま）、船田遺跡、山王林遺跡、井戸尻上遺跡、明神社周辺遺跡、戸板女子短大遺跡などいずれも弥生末期から古墳時代への過渡的様相をもつ集落である。また、日野市神明上遺跡、秋川市前田耕地遺跡、青梅市霞台遺跡などにも同様の住居址が発見されている。